

メルツァーとの対話：精神分析への道程

—ただ一筋に生かされて—

キャサリン・マック・スミス

ここにご紹介いたしますDr. メルツァーとの語らいは、イタリア中西部トスカナ州にあります彼の田舎家の別荘で一緒したときのもので、私たちはテラスに陣取り、夕暮れどきの快い静寂に包まれておりました。向かいの小高い丘には彩やかな緑色に輝く栗の木のこんもりとした林があり、残照が灼々とそのあたり一面を覆う光景を眺めておりました。とてもくつろいだ和やかな雰囲気、お話しながらも一緒に実によく笑ったものです。そしてその後も途切れることなく、彼のオックスフォードのお邸にも折々伺い、こうした語らいを続けてまいりました。お喋りは庭先で、あるいは台所のテーブルを囲みながら、手には煙草やらワイン・グラスを持ちながら……。メルツァーのお住まいはいずれもが、人の往来を避けた、脇の小径の奥まった一角にあり、辺りは放ったらかしさながらに野趣の味わいを残した佇まいで、見晴らしのよい高台にございました。

C. M. S. メルツァー先生は今年75歳の誕生日をお迎えで、あわせてご著書の『The Psycho-Analytical Process』の出版30周年記念が偶然重なりましたことで、最近よくインタビューを受ける機会が多いと伺っておりますが、「Journal of Melanie Klein and Object Relations」の購読者たちは先生の近況なり進展なり、それももう少しばかり個人的な事柄を伺えることを期待しているように思われますの。私が先生を寝椅子に横にさせたりしようなどと企てようものなら、先生はさぞやお困りになって、抵抗なさいますかしらね。

D. M. いやはや、試してご覧になるのも悪くないでしょうねえ。そこでお手並み拝見といきたいところですかな……。

C. M. S. さてと、幼少時の先生は、元気いっぱいの腕白な男の子で、嬉々としてスポーツに興じ、ことさら考え込むタイプでもなく、読書家でもなかったとか。先生はご両親を殊の外敬愛していらして、また彼らにとっても可愛がられてお育ちだったとか。上にお姉さまがお二人いらして、7つ違いで、末っ子の男の子ということでしたわね。先生はいろんな方面に関心やら才能やらをお持ちですから、もしかしたら他の職種にも当然向いていらっやらないはずはなくて、たとえばお父上のように技術職に就くとか。でもまだほんの僅か16歳で先生は精神分析に遭遇して、すっかり心酔されたように伺ってますが。それというのは実に稀有なことというか、ちょっと驚きですわね。いくらか無邪気といってもいい。他の多くの人たちの場合、精神分析との出会いというのは、他のもっと錯綜したさまざまな事情を経て動機づけられるということがありますものね。

D. M. わたしは感じやすく、夢を追いがちなところがありましてね。まあ天真爛漫というか直情径行ですかね。そんな私がそのまま変わることなく、これまでどうにかやって来られたのは、実に精神分析のお陰で言えるわけですよ。

C. M. S. 先生はイギリスにお越しになられた当初、クライン夫人に分析を受けようと一途に望みをかけておいでだったと伺っておりますが。彼女が亡くなられて以降、アメリカに帰郷なさることをお考えではありませんでしたの？

D. M. 否、私はイギリスのごく普通の中産階級の家庭の洗練された暮らしと文化や言葉遣いに痛く心を奪われておりましたし、こちらの風光明媚な田園風景にはとても魅了されていましたから。私がアメリカのミズーリ州の出身なのは、ご存知でしたよね。

C. M. S. ちょっと考えると不思議というか驚きですよ。先生のように、身体を精力的に使うことを好まれるお方が、ほら園芸とか乗馬とかあれこれ戸外でおやりになることをとても楽しまれておいでですよ。それがまあなんと選りにも選って一日に14時間も肘掛椅子に括り付けられて、しかも隔週ごと週末には飛行機に乗り込み、ヨーロッパの何処かへ講演旅行に出かけるなどという生活を送っていらっしゃるなんて。

D. M. まあ私の持ち前の気質からして、まあちょっと驚きと言えば確かにそうですね。でもいかなる芸術の類いであってもそうした刻苦勉励を余儀なくされるってことがあるとは思いませんか。たとえばですが、実は子どもの頃、少し大きくなってからですけど、石の彫刻家になろうと考えていたことが一度ありましてね。もしもその通りになっていたとしても、私は同じだったと思うんですよ。鑿^{のみ}を振るい、石を相手にコツコツと削ってゆくことの繰返し。コツコツコツコツ・・・ですよ。どこか小さなアトリエで、どこか辺鄙なところ。つまり競争世界やら美術市場などとも一切関係ないといったところで。まあそうした事柄にはまるで私は適性がないのは分かっておりますからね。

C. M. S. でも先生は極めて能動的な精神分析家でいらっしゃるんです？

D. M. まあそうですね。言うなれば(例の筋肉質的キリスト教になぞらえるなら)私はまさに‘筋肉質的精神分析家’(訳註1)でしょうねえ。

C. M. S. 要するに、たくさん喋られるってこと？

D. M. ええ、私はたくさん喋りますねえ。ですが、クライン夫人もまたずいぶんと喋りましたよ。多くの精神分析家たちはそれと気づかずに実際のところかなりよく話しているはずですよ。なぜなら話をしたくてたまらないような、実にたくさん興味深い事柄があるわけですから。それは晩餐会などの席に座って

いても、これといった感興をそそる話題などまるで思いつかないのとは大いにわけが違います。もっともまあその場合でもたまたまそこに列席なさっておいでの方々の注目を得て発言が許され、自分にとって何かしら興味のある事柄を語り始めるというのなら俄然話は別ですけれども。面接室では、分析患者の性格やら彼(彼女)に見えている世界像が語られるわけで、そこでは分析家はそれらがどういう筋立てで、そしてどういう意味でそうなのかを理解しようとするわけですね。徐々に自ずとそれはある転移状況に収斂されてゆき、患者自身の病理を例証してまいります。分析家の注意が注がれる領域というのはごく限られておりますわけですね。たしかに分析家は絶えず人の性格というものを扱っているわけですが、初期の頃ならば大まかな描写でも結構なのですが、しだいにその性格の固有なる持ち味やら、さらにはその内容の仔細について微に入り細を穿ってこまごまと注意が払われてまいりますわけですね。

C. M. S. メルツァー先生にとって、どう控えめに言っても人助けという考えというのは、ついぞ先生の心を占めていたようすはまるでなさそうですね。

D. M. まったくそのとおりだと告白しなくちゃなりませんねえ。医者になってからも、たとえば自動車事故を見かけた場合には、真っ先に自分がそこに駆け参じて何かしら手助けをしなければならないなどは決して思わない性質ですよ。それはちょっと見方を変えれば、他人に援助を求めることには不承不承で、まあ出来ることなら成り行き任せで何とかかなと思っていたい、そうした誰かさんみたいな、そんな人の裏返しなんだろうと思いますけど。医療従事者の一員であるということは、この世に私が存在するということに大した意味をもたらすことはなかったですねえ。精神分析家であるということほどにはね……。

C. M. S. でも人々が分析を受けに来るとした場合、彼らは、たとえばもっと愛することができたらとか、もっと憎しみを抱けたらとか、あるいはもっと心が成熟した大人になれたらとか、感情をもっと‘感じられる’ようになりたい、心の葛藤のあれこれを解消したい等々、深い悩みをいろいろと抱えていらして、だから援助を請うているとは言えませんかしら。しかしどうもそうした患者側にとって予め想定されている具合には事は運びませんようですね。

D. M. まあ私が見た限りでは、実にそのとおり、まるでそうした成り行きにはならないわけですよ。つまり私が言わんとするところは、分析家は患者に治療を提供しているわけではなくて、関心を提供しているわけですよ。関心とか思慮深さとか、分析家の考えた事柄やらその見解をごく率直に表明することでしかない。それがまたどうして場合によっては治療的効果を持つに至るか、私には何とも言えませんが、ただ、真実が語られるということは巷の日常のここかしこに遍在している現象ではないという点が挙げられますかね。私は自分が正しいということにはまるで興味がなく、興味を覚えるということに興味があるに過ぎないのです。分析家というものは観察者であり、そして分析患者について何某か新たに発見する事柄があるとしたら、それは観察に基づくものであって、彼(彼女)が語る生育歴とか既存の理論体系に基づくものでは決してありません。

C. M. S. ところで、その観察している最中に、寝椅子に横たわっている分析患者が視野の中に入っているのは、邪魔になりませんか？

D. M. たとえ患者がこちらを見ていなくても、こちらとしては患者に眼差しを注いでいるというのがいいと思われまますよ。この場合、声の音色・響きが実に重要なのです。それこそが実は分析家の内的対象の声であり、またそれこそ分析家が分析患者と分かち合っているものだからです。

C. M. S. それって、逆転移とも少し違ふみたいに聞えますけれど、どうですかしら？

D. M. 熱中して物事を考えるということは無意識の営みです。ピオンは、情動的体験を力説した、実に最初といってもいい哲学者です。森羅万象に対しての己自身の情動的反応をつぶさに観察し、さらに熟考することにひたむきに打ち込む、それが総てのことの始まりなわけでした。だから患者を‘理解する’といった考えを、私はもはや放棄しております。それに伴い、他の観念的な概念、従順とか忠義とか信念とかもですが。精神分析に関する限り、そうした概念は何ら意味をなすことはありません。そして尚そこに依然として有るものと言え、感情、思惟力、想像力……人類の一員となるといったような。それがまた私をこの業界において不人気にしている理由だとも思えるわけでした。

C. M. S. 先生は時折とても格言的な物言いをなさる。それって智慮に富んでいてずばり的を射ているといった意味でもありますけど。でも人がそれを聴いた瞬間、どうも困惑させられますのね。たとえば、‘あなたが為すところを説け’といったことやもそう。いつもながらの陳腐な常套句(「説くところを為せ」)を逆さまに言って新味溢れるものにするのはいいとして、先生はつまり何を本当のところ言わんとしておいでなのかしら。いかがでしょう？

D. M. ええ、本当に逆説を弄しているわけではまるでなくて、実際のところ実にそうとしか言いようがないのですよ。‘あなたの実践するところを説け’というのはまったくのところ凡庸な言いぐさで、およそいかなることにもあてはまるわけです。私は率直であろうとの努力を常々励行しているわけで。だから私は私の意味するところを言い、そして私が言うところをそのままに励むわけでした。だから、もしもそのとおりだとしたら、その結果は為すところを説いているということになりませんか。まあ実にそうなるとしか言いようがない。言うなれば、面接室で実践していることがまずは最初に有りきなものでして、だから何かを説くことは事実そうした実践の結果なわけですよ。もっとも、もしもそうじゃないとしたら言行不一致で、紛れもなくただの詐欺師になるわけですよ。

C. M. S. それを伺って思いますに、先生にはこれといった策略というか、政治家みたいに策士然としたところはまるで皆無なように聞えますけれど。

D. M. 敢えて策を講じないというのはそのとおりだと思いますが、でも私はけっこう狡猾とも言える。それは狐が罠を嗅ぎつけて、決してそれに嵌^{はま}らないように避けるといった具合にだが・・・。

C. M. S. 敢えて質問に答えないといったふうにですかしら？

D. M. そうですか。私は罠からちょっと身を引いてやり過ぎしているだけです。だから一見して私は質問に答えてないみたいに見えるわけですけど。でも実際のところ直接的な言葉で質問に答えてないとしても、その質問に関連して何某かの面白い着想が思い浮かぶのをあれこれ心の裡で懸命に模索しているわけですし、たとえば「奥さんを今でも叩くこと、あるんですか？」とか・・・。

C. M. S. 先生は、私の知る限りのどなたと比べてみてもはなはだしく人の心の内に心理的動揺を呼び覚ますところがありですよ。その理由の幾らかは、先生のお考えの独創性に対するの敵意に関係していますかしら。しかし併せて先生の堅忍不拔の精神とか、横並び感覚の欠如やら、妥協を潔しとはしない態度、さらには人を傷つけたり悶着を惹き起こすのを避けるために融和的に自分の意見を加減するなどまるでなさらぬ姿勢にもおそらく関係していますよね。事実として、どうも先生は論戦をむしろ好まれておいでで、そのことには極めてあけっぴろげでいらっしゃる。ご自分にとって最大の価値が何であるかと言えば、ご自分が何を考えているかという点であって、だから先生にとっては、先生を操縦せんとする輩は言うに及ばず、うまく利用してやろうなどと企てる輩などは、それが誰であろうと、災いあれかしといったところなんでしょうね。

D. M. あなたはまったくとても上手にすてきに言い当ててくれましたねえ。それがつまりはある意味で私が自らを‘筋肉質的精神分析家’と称したところの所以なのです。要するに、私が自らの見解に到達する際は、誰彼の影響にいちいち左右されは致しませんし、ただ眼前の証拠事実が変わることでは動かされないので。ですからつい私が自分の見解を述べる時には断固たる口調になってしまいがちで。まあ喧嘩っ早いというか。それは昔からずうとそうで、今尚そうなのです。それでもその一方で、私は証拠事実というものには至極敬意を払うところがあって、だからすべからず私が述べるところのものはあるためらいを込めた仮定として話しているつもりなのです。でもそれは証拠事実との関連に限ってであって、論理とか理論とかはまるで関係致しません。

C. M. S. でも先生が証拠事実と見做されるものとは、はたして何なのでしょう？

D. M. ああ、そうですねえ。たしかにそれは難しい問いかけだ。精神分析という臨床実践において、証拠事実とは何か・・・じゃあ、その質問はひとまず心に留めておくことに致しましょう！

C. M. S. ここに至って如何でしょう、精神分析に疑念を抱かれることはおありですかしら？ 巷では

そうした攻撃は極めて執拗ですし・・・それも先生ご自身が生涯を捧げたものについて、その価値ということでは、どうお応えになりますかしら？

D. M. まあそうですね。私は‘負の能力’（訳注2）というものの熱心な信奉者だと思っているものですから。それだからか精神分析の価値というものには、とても根強い懐疑を抱いておりますし、どうしてもまた自分の生涯をこれに費やすことを選んだかという点についてもね。

C. M. S. 他の職業選択をしたならばどうだったろうと思われまして？

D. M. もしも音楽的才能があれば、音楽家になっていたでしょうねえ。科学にはそれほど魅了されませんし、昔からそうなのです。ただし、無論のこと科学には敬意を払っておりますし、科学に関連しての頭脳的遊戯はそこそこ楽しんでいるとも言えますけれど。

C. M. S. 精神分析的探求は、知に対する先生の渇きを癒したと言ってよろしいですかしら？精神分析家であるということは、先生にとっては単に職業というのではなさそうですね。敢えて申せば、先生の存在そのものというか。それは詩人がまさにそうであるように。詩人であれば誰も、「私は詩人を職業としています」とか「私は詩を書いています」などとは言いませんでしょう。先生は紛れもなく精神分析家として在るという以外の何者でもない方ですわ。（訳注3）

D. M. 精神分析は私に、一つの統合的な視座を持つ世界観を与えてくれたわけですよ。それが実際のところ精神分析に期待する総てだと言い切っても思われる。そこに尚も纏わりつく疑念があれば、それはその統合性のごく一部と見做してね。私が音楽というものに羨望を抱きかつ敬服をも覚える理由は、すばらしくみごとな表記法があるという点です。今や、科学はかなり優れた表記法があるわけで、ですからそうしたものの欠如が実に芸術的精神分析家たちの頭を悩ましていとも言えます。もちろんピオンをも悩ましたと言えるわけで、だから彼は擬似数学に^{くちばし}嘴を突っ込むようなことを敢えて致しましたし、それを彼は（例のルイス・キャロルになぞらえて）ドジソニアン（Dodgsonian）（訳注4）と称しておりましたが、^{おも}惟うに、私たち分析家は私どもの手持ちの言語を最大限に活用し、それも詩情に溢れかつ精緻の極めたものにしてゆくということをぜひ提唱したい。それこそがわれわれの表記法なのです。そしてそれがどのように進化してゆくものか皆目分からないといえれば確かにそうで、およそそれがより詩情に溢れ、かつ精緻さをより極めたものになるという以外にはね。

C. M. S. 先生は、ずいぶん昔に、ご自分を‘狂信者’とおっしゃっておいででしたわね。その当時はそれをたしか過剰で理性分別も何もない熱狂という意味で捉えられておいででしたわね。ひたむきな熱中とか献身といった意味ではなくてね。でも私は、どちらかという先生はむしろ後者に思われるのですがね。

D. M. そのとおりですね。まあ、狂信主義というのは、攻撃的な意味合いでの恋慕の情によく似たものとも言えますが、それは常にその恋慕の対象が手の内で支配され占有される必要があります、そうした考えを前提としていて、それが故に、それはピオンの言葉を借りるならば、ある種の‘負のグリッド’なのです。恋慕の情というのは全然違うものです。それは献身やらある意味での恭順、そして恋慕の対象に対しての奉仕の精神が喚起される何かなわけですから。その相手が誰かしら人であろうと、何らかの組織であろうと、何某かの考えであろうといずれにしても。つまりは、熱情の辿る進歩というものは、真実まさに‘ピルグリム(巡礼者)の道程’(『天路歷程』)(訳注5)なのであって、それで誰彼の足を掬うことにもなりかねない、全面降伏を強いられるようなもので・・・もちろんそれは空恐ろしいことですよ・・・しかし狂信主義というのは本質的に底知れずに深く政治的であり、攻撃的で、支配性の強い、横暴極まりないものです。私が自らを狂信者と呼んだのは、まさにそうした違いに疎か^{うと}ったからで、熱情というものをその強烈さの事象として考えていて、そのことの複雑さがまるで分かっていなかったのです。そこでピオンのL, H, Kといった表記法が実にその違いを識別するにあたって重要な鍵となりまして、そのお陰で後々私は『The Apprehension of Beauty』という書をどうにか著すに至ったと言えるでしょう。

C. M. S. 精神分析に対して先生が公に吐露しておいでの中は周知の事実ですが、それって、先生の私的な熱情とはどのように関係づけられますかしら？

D. M. そうですねえ・・・それは私の生まれ育ちの境遇に関係していると思われれます。その場合の価値観の一つが、紳士的な振る舞いといったもので、紳士というのは、その敬慕の対象に対しては従順なる下僕であらねばならないというものでして。私は精神分析に対してはその従順なる下僕であったわけですね。まあ元来私の身に付いた基本的な態度と言えるでしょう。

C. M. S. 先生は精神分析を愛するほどに人を愛すると言えますかしら？

D. M. さあてねえ・・・誰か人を愛するといった話をするとすれば、まったく正直に申して、それは瞬間瞬間が問題になりましょう。なぜならば人というのは余りにも変幻自在で、さほどに想定し難いものですから。誰かをずうっと首尾一貫して徹底的に愛することができるとは、ただもう有り得ないことのように思えます。精神分析なら、私はそれを実践し続けながら、徹頭徹尾どこまでも愛してゆく自信があるのですけれども。でもご存知のように、私は精神分析関連の仲間たちを大して愛してはいませんですからねえ・・・まあ私に言わせれば、そうした場合に唯一可能なことと言えば、彼らが再び愛すべき何者かになってくれるのを辛抱強く待つということだろうと思うんですよ。

C. M. S. もしくは、先生の方にこそ、愛する能力が戻ってくるのを待つということでもありますかしら？

D. M. さあてね。私は‘ピルグリム(巡礼者)の道程’(『天路歷程』)について話をしているわけですが、75歳という年齢になって、誰かを愛する能力がいや増すとは思えませんがねえ。ただ希望的観測としてまあこれだけは言えるとしたら、精神分析やらそれ以外のどんな方法でもいい、さらにいっそのこと倦まず弛まず愛の能力に鍬入れをしつつ続けてゆくということでしょうかねえ。

C. M. S. 先生の言わんとするところというのは、誰かがより愛すべき何者かになれるかどうかはまるっきりその人自身の問題だということですか？

D. M. ……ええ、まあおそらくそういうことになるでしょう。それが忍耐とか赦しとかの本来意味するところだと私には思えるわけで。要するに自己吟味をどこまでし尽くしてみても、それでたくさんのご利益があるというわけではおおよそ無いということになるでしょうね。それで有益とは何かと申せば、それは忍耐と赦し^{ゆる}でしょうねえ……ただし、もちろんのこと、相手にしてみれば、赦しを貰うということは嬉しいわけでもないでしょうが。

C. M. S. 先生ご自身のことを言えば、如何でしょう。精神分析家という職業はご自身を理解する上で助けになりましたかしら？

D. M. おおむね分析患者との共同作業、それに誰彼との親しい間柄を生きるということはほぼ似たりよったりなのです。私にとってはそのいずれにおいても心の仕組みを理解することに力点がありますから。だから逆転移を通して、私自身の心の仕組みを理解することにもなります。そして今や、それで私がどういう仕儀となったかと申せば、その結果は物事をあまり個人的なこととしては取らないという私の姿勢でして。でもそれは事と次第では誰彼をひどく激怒させないとも限らないわけです。もしも誰かがあなたを傷つけようとしていて、でもその人がそう簡単に傷ついたふうにはまるで見えないとしたら……それどころか、辛抱強くひたすら理解しようと努める相手を見たら、彼らはそれを喜ぶとは限らないでしょうね。さて、この心の仕組み、その力動性にではなくてですよ、その仕組みそのものに力点を置くというのは、私が‘拡大メタ心理学(Extended Metapsychology)’と呼ぶところの顕著な特徴なのです。その典型としてはクライン夫人の業績、そしてその後にはビオンの業績があげられますね。それは愛と憎悪の葛藤の概念ではなく、混沌・迷妄といった概念に関わり合っていて、それこそが精神分析を果てしなく興味深いものに行っているわけでした。要するに、分析家は愛憎の修羅場に巻き込まれずに、心の混乱状態を認知し理解しようとする企てに積極的に関与できるわけです。私にとって‘K’とは事象すなわち生きた事実なのです。誰かしらある患者に興味を抱き、その精神の仕組みについて、その心がどのように働いているかを熟考するとは、その人の経験やら、その彼(彼女)が語る情報とか知識などについての、相対的な低次元ともいえる興味とはまるで似て非なるものなのでして。だから分析家にそうした方向づけをもった確固たる態度があれば、とめどなく次から次へと心ときめく魅力的な分析セッションが生起するとも言えるわけですよ。

C. M. S. いつもの事ながら、私が愛について語ると、先生はどうも興味やら関心についての話をなさるといふ具合に、脇道へ逸れておしまいなのですね。

D. M. ええ。いつしか私は斯くなるべくしてなっているということらしいですねえ。私の他人に対しての必要感も狭まってゆく一方です、社会性といった能力も、社会的に他の人々と交わるといった娯楽も含めてですが、かなり減退してまいりましたねえ。公に承認されたいといった欲求もごくごく色褪せた感が致しますし。そのお陰というのも何ですけど、私は自分が人に対して愛想がないなどいちいち思い煩うことなく、我が道があるがまま気儘に歩んでこられたと言っていい。まったく私は人に対してずいぶんと素っ気ないのは確かなわけですね。

C. M. S. それらのある人たちに言わせれば、先生は精神分析に新たな地平を切り拓いたというよりも、むしろ孤立無援だと中傷されておいでですね。

D. M. ええ、それってそのとおりでしょう。私は孤立無援ですし、まあ要するに‘K’の尖端というか、どうもね、孤高の人ってわけですか。それである種の冷やかさとかよそよそしさとか無頓着といった印象を持たれる所になっている。それはごく承知しているところです。しかし正直なところ、私が安心を保証されたいがために他人との交流を求める欲求はずいぶんと希薄になっておりますし、私の安心というのは益々もって内なる源泉に由来しているようでして。まあ現にある一つ二つの人々との結びつきといった例外は別としても……。

C. M. S. そうですね。お独りでお暮らしですけど、先生の内側に先生に寄り添い伴われる方たちがご一緒においでということなのですね。

D. M. ええ。ですから私はそうした理由で、孤独感のゆえに心が痛くさいなまれるということはないのでして……。

C. M. S. 先生はご自宅では、ごく控えめに、どちらかと言えば、慎ましいお暮らしぶりですらいますね。先生の治療費というのが、先生のお弟子さんたちが今設定しておいでの規定料金よりも少なめと伺ってますけれども……。

D. M. ご存知のように、私は分析家というものがことさらに裕福な職業人としての仲間入りをすべきだという考えを持った例がありません。かつてある時期には、心密かにではありますが、分析家は‘清貧の誓い’を立てるべきものと考えておましてね。まあそれは必ずしも分析契約を割引価格にしろということではないのですけれども。でもたまたま手に入れた富やら財産というものに対して奢りは極めて禁物だからです。かつて私は思ったものです。もしも過剰な金銭を得たら、いつでもそれを放棄することは容易なことだと。しかしまあそれが実際のところ決して容易じゃないということが判りましたわけで。つまり、

その過剰なる分を取り除くことはできますが、しかしそうすることで何かしら有益なことをしようとする限り、われわれの現況では、実に際どいものがあるわけでして。『Roland Harris 財団』創設はとても喜ばしいことでしたが、少なからず失望感をも味わうことになりましたわけで。人に恩着せがましさを感じさせずに、しかもそれに幾ばくかの真実があるという思いを抜きにしては、人は人に対して気前よく施しをすることなど出来ることではないようですね。

C. M. S. かなりの分析家たちは自分たちはとても特別と感じていて、だからそれに応じた料金を提示して然るべきとおよそ考えているみたいですね。

D. M. そうそう。まあ言えばお金に対する貪欲さはまったくのところ底なし沼みたいなものでして、分析家がそこに簡単に嵌まるとしても無理からぬこととも言えますし、いったん嵌まればなかなかそこから抜け出すことは非常に難しくなってしまう。長年私が主張してきたことなのですが、分析家が出来ることというのはごく僅かでして、ただひたすら転移過程が自ずと展開してゆくように、ジッと監視し続け、そしてそういう事象を描写し得る何らかの言葉を見つけてゆく、そういう具合に分析状況を抱えてゆくこと。それ以外にはほとんど為すべきことはないと言っていい。ですから、もしもそうした転移関係の派生物としての事象のあれこれを不遜にもこれ見よがしに吹聴したりするならば、実に分析家自らが己自身を貶めることになりましょう。

C. M. S. 先生をまさしく天才に近いと考える人たちが少なからず居るということですが、ご自分としてはどう思われます？

D. M. かつての教育分析のお陰といいましょうか、私の生来の人好きのする性格というのはものごみに脱錯覚を遂げましたからねえ。私はどんどん自分が‘いい人’とは縁遠いものになっているように思えますし、どちらかという、ますますもって沈鬱な気分が陥りがちでしてね。私はことさら頭脳明晰というのでもないですし、実際のところことさらに教養があるとか学究的な才覚に恵まれているわけでもないですね。もっとも分析家としての私の強みというのは、実に私の仕事つまり精神分析に対しての愛なんですよ。だから私は全身全霊で打ち込んでいて、命懸けとも言えますし、それでまあまずまず大概のところは手堅く、相当な腕前だと自負しておることは確かですけれどもね。

C. M. S. 先生は、この30年間に一日たりとも臨床をしない日はないというわけですが、それでも天才呼ばわりされることを固辞なさるのですか？

D. M. 人々はその言葉をいい加減に使うことがありますよね。それは理想化された転移とか過大評価の類いじゃありませんかねえ。

C. M. S. 精神分析には未来はありますかしら？ いかがご覧になられてます？

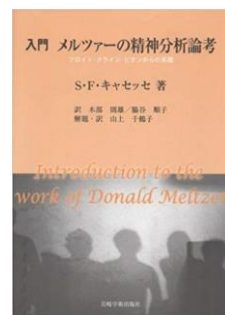
D. M. ビオンがかつて(彼のアメリカ移住に纏わる話で諧謔的に)語ったとかいわれる言葉をなぞればですが、(彼の場合とは違って)どっさり名誉・名声を担わされて、その重みで沈没し、海の藻屑となって跡形もなく消えてなくなる心配などはちつともないでしょうよ。まあ彼もどこかで語っておりましたけれども、精神分析への理解やら関心についていえばめまぐるしい変遷があるわけでした。最初はまず嘲笑に晒され、それから当然視されて、さらにはその挙句にその先達者の剽窃という非難を免れることはできないといった具合にね。

C. M. S. 先生ご自身の生涯とお仕事を振り返ってご覧になられて、いかがでしょうか。例の今はやりの流行の歌(「マイウェイ」)の歌詞を借りて申すならば、‘信ずるままに一筋に我が道を斯く生きた’という具合ですかしら？

D. M. 否、否、私は自ずとこの道に斯く生かされてきたのですよ！！

(訳: 山上千鶴子)

[付記; 原題は、“I’ve been done its way!” An interview with Donald Meltzer であり、「Journal of Melanie Klein and Object Relations」(16; 1998)に掲載されたもの。 著者の Catharine Mack Smithは、Tavistock Observation Course(Oxford)に所属し、シニアの児童精神療法家ならびに指導教官であります。



尚、この邦訳文は、

Cassese. S. F. (2001) Introduction to the work of Donald Meltzer. Edizioni Borla. Italy. の邦訳書; 『入門 メルツァーの精神分析論考—フロイト・クライン・ビオンからの系譜』 木部則雄・脇谷順子訳 山上千鶴子解題・訳 (岩崎学術出版社 2005) からの抜粋で、附録1(P.99-116)として掲載されたものであります。 (2018/12/10 記)

訳注1) 原語は‘muscular psychoanalyst’。英国の聖職者であり著述家のチャールズ・キングズリー(1819-1875)が提唱した muscular Christianity(筋肉質的キリスト教)を念頭に置いての発言と思われる。その本来の主旨は、快活に身体を活動させて生活を送るキリスト者の生き方を言う。この場合のメルツァーの狙いは、自分を専ら格闘技的な‘舌’を操るタイプの精神分析家だと言わんとしたことにある。

訳注2) 原語は‘negative capability’。出典は、英国の詩人ジョン・キーツ(1795-1821)の書簡集で、彼は弟らに宛てた手紙(1817/12/21)の中で、彼がその着想を得た趣旨を、それが芸術家の創造性に不可欠な資質であり、「真実や道理を性急に追求することをせず、不確実、謎、疑惑の状態にとどまっていられる能力」として言及している。キーツは、これを不可知論(agnosticism)との絡みで、飽くまで未来を志向しつつ、そこに耐性や自己抑制の必要を説いているのだが、さらに派生的に彼の次なる直感的閃き、すなわち、あらゆる思考を凌ぐものとしての美意識 the sense of Beauty の機能にも言及している。メルツァー理解の見地からしても興味深い点である。

訳注3) 詩人・堀口大学(1892-1981)に、次のような一篇の詩がある。

自戒

詩人とは

ひとりで

ずっと

在ることだ (詩集<夕の虹>から)

キャサリン・マック・スミスによる、精神分析家と詩人がその実存において緊密な繋がりを有するとの一連の発言は、極めて含蓄が深い。彼女の慧眼にブラボー！の拍手を送りたい。

訳注4) チャールズ・ラトウィッジ・ドジソン(Charles Lutwidge Dodgson)(1832-98)は英国の数学者。ルイス・キャロルは、童話作家としての彼の筆名。『不思議な国のアリス』などの著作で有名。ナンセンス物語詩、パロディーやパズルづくりなどを得意とした、言葉いじり癖のある遊戯的人間(ホモ・ルーデンス)。ピオンの著者の中に、殊の外彼が関心を抱いている数学の領域というのが、(彼がドジソンにことよせて駄洒落風に称したドジソニアンもしくは『鏡の国のアリス』の類いだといった言及がある。(「ピオン著『Transformations』第11章参照」)。ピオン理解の一つの‘種あかし’として注目されよう。チェス盤にも似たピオンのグリッド(THE GRID)は、ドジソンの晩年の著『記号論理学』の影響の一端を示すものか。

訳注5) 原語は‘the Pilgrim’s Progress’。英国非国教派の牧師で清教主義作家であるジョン・バニヤン(1628-88)作の寓話物語。題名を直訳すると‘巡礼者の遍路’だが、わが国においては和訳名の『天路歷程』で名高い。この17世紀清教徒文学の傑作は、その基調音において、かつて念仏聖と謳われた空也上人(平安中期)の‘捨ててこそ’の一念と何処か通低している。詮ずるところ、仏教語の‘解脱’とか‘放下’を説くもの。この瞠目すべき書がメルツァーの愛読書であったとも推察されるとして、もしも事実そうであるなら、本著において顕在的なかたちとなった分析家メルツァーの人となり、そして生きざまをこの書に重ねて辿ってみるのも一興かと思われる。